

野菜生産と「L I S A」

大 場 茂 男

今年の夏は長雨と低温の連続で、特に稲作は昭和9年以来の凶作という打撃をうけている。露地野菜を主とする三浦半島地域農業の夏作はどうであったか、最初に現地の状況にふれ、ついで農業と環境保全の問題、さらに関連して冬春作の主力野菜であるダイコンの新しい栽培技術問題など最近の現地農業の動きについて報告する。

第1に、三浦農業を代表する夏野菜のなかで、冷夏の影響を最も大きくうけたのはスイカである。作柄としては半作、所得面では3分の1というのが全般的な実態である。この程度にとどまったのは作期の分散による早生物の出荷によるところが大きい。メロンについてはトンネル栽培であり朝晩の換気の調節など周到な管理で、若干生育の遅延はみられたが、平年作の80%程度にとどまっている。かぼちゃについては平年作に近い作柄であったのは5月後半から6月上旬と収穫期の早いことによる。一方、現在11月下旬、ダイコン、キャベツの圃場は緑が日毎に濃さを増して拡がっており、気象が平年並みに推移すれば順調な生育と収穫が予想される。

第2に、環境保全にかかわる問題である。ここは露地野菜を中心とした都市近郊の土地利用型農業であるが、徹底した「土づくり」を農家と農協が一体となって進めている。これは環境に影響を与える農薬や肥料の使用量を減らす一方、土地に適した効果的な施肥や天敵利用による害虫防除など、環境にやさしい農業として、いわゆるリサ (LISA: Low Input Sustainable Agriculture)=低投入持続型農業と呼ばれるにふさわしい内容で、三浦農業はその代表的事例ともいわれている。ここでは①農協の指導と農家の協力による有機

物の積極的な投入とその効率の利用、②土壌診断による圃場に適した施肥設計と施用、③マリーゴールドなど拮抗植物による病虫害防除など農業に余り依存しない技術などが特徴的である。②の施肥についてみても県内他地域の同じ野菜の施肥基準量に比較して施肥総量が少なく追肥重点の分施がなされている。

第3は、環境保全的な農業とも関連するダイコンについての最近の栽培技術についてである。三浦地域の農業を支えているのは冬春作のダイコンとキャベツであるが、このうちダイコンについて特に「キタネグサレセンチュウ」防除は、マリーゴールドの栽培すき込みが、農業によらない耕種的防除として環境保全にも好ましい方法であることは既に報告したが、さらに最近県農試三浦分場の3年に及ぶ試験から新たな拮抗植物の検索が明らかにされている。それはエンバク系統の植物である「ヘイオーツ」が、マリーゴールドに匹敵する防除効果をもつことが確認され、既に本年度は10haの作付けが農家に普及したという。試験場の研究に対する農家の強い期待と関心が伺える。

なお試験研究の成果をどう農家に伝達し、それを利活用してゆくかは重要な問題であり、試験場へは生産技術としてその実用化が絶えず要求される。その点で三浦分場は積極的に地元農家や農協などと常に交流を怠らず研究を進めている。毎年4月下旬試験成績検討会議を2回に分け開催している。第1回は研究者を中心にしたものであるが、第2回は地元である各農協、各市産業課、普及行政などの関係者が参集し試験成績の伝達会議としている。成績発表に対する熱心な質疑と、現場からの具体的な問題が提起されて検討が行なわれていることを併せて紹介しておきたい。

(神奈川県横須賀市舟倉町

前技術情報協会職員)